

地域活性化という「遊び」

30

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュユ村」から

山本晋也

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいくなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュユ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュユ村副村長。



メンバーは前日よりみわダッシュユ村で宿泊、元気に出かけて行きました。

ある朝

集落のおばあちゃんが泣きながら電話をかけてきました。「遊くんたちが北海道から手紙をくれてなー」

「ほんまに嬉しいわー」

草刈りや農作業、豪雨被害の復旧カフェの屋根修理などの大工仕事、夏のイベントでの料理人とぶつ通しで作業をこなし

無事イベントを終えた次の日の夕方北海道行きのフェリーに乗るため舞鶴港へむけ

我が家の3人組が自転車にまたがって

元気に出発していききました。

約1カ月北海道一周約2500キロの旅だそうです。

北海道一周自転車の旅に出た子供たちが日常から離れて見るもの

もともと

子供の行動は子供に任せる方針ですし

今は携帯電話、電子メールの世の中でもあるので

手紙を書きなさいともなんとも言わなかったのですが

出発して約10日限界集落に一人

取り残された妹や

友達、親戚のおっちゃん、おばちゃん、お姉ちゃん、

自分たちのおばあちゃんから

集落のおじいちゃん、おばあちゃんまで



妹には毎日のように手紙が届きます。読みやすいようにひらがなで書かれていました。

毎日手紙を書いていっているようです。

だいたい1日に70〜100キロを走っているのですが

走りながら今までの自分やこれからの自分について

いろいろといつもより深く考えるの

でしょう。特に長男の手紙からはそういう感じが読み取れます。



■ バイク修理も旅の醍醐味？



山間の村に暮らす子たちは沈む夕日を見る機会がありません。真っ暗になるまで眺めていたそうです。



道を尋ねた地元の方にスイカをもらったりとても優しくしていただいているようです。

北海道一周の話がでたのは 約1年前

次男が中学を卒業したら二人で行こうと計画していたようですが同時に小学校を卒業する三男がどうしても一緒に行きたいということになりました。上の二人だけなら年齢的にも体力もほぼ互角だし料理もできるしなんの問題ありませんが三男が行くととなると

上の二人には自分の事だけでなく三男の安全と1カ月間の健康維持という責任のしかかっています。上の二人はプレッシャーでせっかくの旅行が楽しめなくなるかもしれない。しかし挑戦したいという三男の気持ちも汲んでやりたい。親の判断だけでは決められないのでいろいろ家族で話し合いを続けた結果三人で行くのがいいということに決定。冬の間それぞれお年玉を使わず貯金しておいたりアルバイトをしたりしてそれぞれに合う自転車や必要なキャンプ用品を揃えていきました。最終的にうちの子どもたちと同じように高校へ進学せず自ら学ぶという方向を選んだ友達三人が参加することになり合計6名で今北の大地を楽しく走っています。

学 校の修学旅行などと違い 計画の時点から

行き先も目的も予算も自分たちで決めなければならぬ旅が始まれば天候や自分や仲間たちの体調で予定していた距離を走れなかったり

キャンプの予定を急遽ゲストハウスにするなどその場その場で素早い判断が要求されます。みんなまで自転車旅行は楽しい！ましてや北海道！とウキウキ出かけて行きましたが隊列の先頭を走る最年長の長男はそんなプレッシャーもあって旅の始まりからしばらくの間体調を崩したらしく自転車で走るのが精一杯。北海道の美しい景色や美味しいものもあまり食べられなかったようですが僕は若い頃の旅というものとはそれくらいの方がいいと思っています。「日常から離れ何を見るかというよりそこで何を感じるかが大切」山に囲まれた人口12名の小さな集落から初めて子供たちだけで飛び出すことにOKするのはちょっと勇気がいりましたがやって大正解。きつとひと回りもふた回りも大きくなって帰ってきてくれるでしょう。毎日のように妹あてに届く葉書の山を見てそんな思いを噛みしめているところです。